

穂学



令和5年度

広州日本人学校 学校便り

[No5]

令和5年7月12日(水)

発行責任者 校長 加藤康徳

「なんちゃってAIのお話です。」

「生成 AI」が教育界においても話題となっています。先日文部科学大臣が「生成 AI は、個人情報流出や著作権侵害などリスクも懸念される一方、使いこなす力を育てていく姿勢も重要だとして、活用が有効な場面を一部の学校で検証しつつ、限定的な利用から始めることが適切である。」という談話を発表しました。本校としても活用する上でのメリットとデメリットをしっかりと検証しながら「効果的な活用方法」について検討していくことにします。

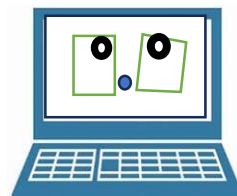
なお、文科省が示している具体的な例（不適切）は以下の通りです。このような方法で活用することが無いように気を付けます。

- ▽生成 AI のメリットやデメリットなどを学習せずに子どもたちに使わせること
- ▽読書感想文などのコンクールやレポートを提出する際、生成 AI がつくったものを自分の成果として提出すること、
- ▽定期考査や小テストなどで子どもたちに使わせること など

さて、私は「AI」と聞くとある思い出が頭を過ります。約20年前、私が1年生（約20名）を担当していた時の話です。「教師以外の第三者が授業の中で子どもたちをサポートする場合の効果について」という目的で、事前にパソコンに書き込むとロボットの声として音声を出すというソフトを使って一か月間、主に生活科の授業で実践したことがありました。子どもたちも知っている「ロボット・〇〇イ」が突然、教室に来て子どもたちと学習をするというストーリーを設定し、6月のはじめこの「ロボット・〇〇イ」が教室のパソコンから子どもたちに語り掛けてきました。「1年生のみんなこんにちは、ぼくはロボットの国からきた〇〇イです。これからぼくも一緒に授業を受けたいです。いいですか?」（※私が事前に打ち込んだ言葉をその場で指定しています。）「今日のめあては、〇〇だよね。加藤先生!」（※私との掛け合いもバッチリです。私がストーリーを作っているのです。）

そして日々の授業が進んでいきます。時には子どもたちの質問に答え、時には社会のルールやマナーについて気付かせ、また、ある時は子どもたちと意見を交換したりしました。（※もちろん、私が予想される文章を事前に打ち込んでいます。）

子どもたちの様子はというと、興味や関心を持って授業に参加していました。それは態度から分かりました。姿は見えず、スクリーンに映った文字とスピーカーから聞こえてくるロボット・〇〇イは、しっかりと意思を持ち（※私が書き込んでいます。）、子どもたちの疑問に答えたり、励ましたりしてくれます。この「何かロボットらしいもの」の存在に子どもたちは親しみと楽しさを感じながら授業に参加できたのだと考えています。



しかし、それから20年余りが過ぎ、「なんちゃってAI」が本当の「AI」となって現実に教育界にやってきました。活用方法の議論についてはまだ始まったばかりですが、既に現実に活用されている事例もあります。

20年前の私の実践では、「なんちゃってAI」はどちらかという子どもたちに寄り添う存在でしたが、ひょっとすると今の「AI」は「教師」と「寄り添う存在」が逆転する可能性も考えられます。それぐらいこの「AI」の活用方法は未知のものであることは確かです。

「AIは有効活用」の方向で日本の教育界が動き出しました。繰り返しとなりますが、今後の動静にも注視しながら本校も有効活用の道を探っていきます。保護者の皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

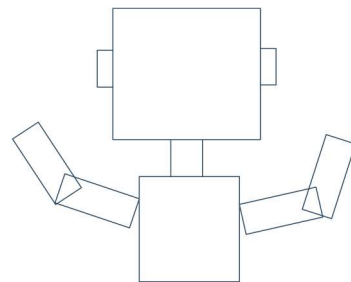
●余談です。

この「ロボット・〇〇イ」3週間ぐらい経った時、ある問題に私は気が付きました。それは、「どのように子どもたちと〇〇イがお別れをするか。」ということでした。

1学期も終わりとなる7月のある日、生活科の最後に〇〇イに話をさせることにしました。「ここでおみんなに言わなければならないことがあるんだ。実は今日の授業を最後に僕はロボットの国に帰るんだ。今まで仲良くしてくれてありがとう。……。いつもは声しかみんなに届けられないんだけど、今日は最後だから特別に姿を見せるよ。窓の外を見てごらん。」外には私が作成した〇〇イの顔の段ボールをかぶった同僚が子どもたちに手を振っていました。すると、教室は大騒ぎとなり「〇〇イだ！」と叫びながら全員飛びだし、その子どもたちを私は追いかけてきました。

後で同僚から聞きましたが、追いかけてくる子どもから身を隠すのが大変だったようです。(※同僚は段ボールを被っていることもあり躓いて転んだそうです。もちろん、校地内の話です。)

当時、私が受け持った子どもたちはもう30歳近くになっています。1年生の時、教室にロボットの国から「〇〇イ」が来て一緒に学習したことを今ではどう思っているのでしょうか。いつか聞いてみたいです。



「広州日本人外籍人員子女学校とは」

本校の概要について誤解されている部分がありましたので、改めてこの号でご説明させていただきます。

- ① 本校の正式名称は「広州日本人外籍人員子女学校」といいます。
※市に登録している正式な名称です。日本人社会に対して「広州日本人学校」という名称を使用しています。
- ② 本校は広州市内のインターナショナル校と同種の「私立学校」です。(公立学校ではありません。)
※設立・運営母体は「広州日本商工会」であり、他の日本人学校と連携することはありませんが、その組織、運営については完全に独立している学校です。
※教育内容は日本の「学習指導要領」を参考にして編成しております。